



TITLE:

健康科学集談会抄録集

AUTHOR(S):

CITATION:

健康科学集談会抄録集. 京都大学医学部保健学科紀要: 健康科学 2006, 2: 81-87

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/39582>

RIGHT:

健康科学集談会抄録集

1. 母親の第1子に対する養育意識とその影響要因

—第2子妊娠中における分析—

坪 田 明 子

研究の目的

本研究の目的は、第2子妊娠中の母親の第1子に対する養育意識とその影響要因について、妊娠各期の特徴を明らかにすることである。それらが明らかになることで、第2子妊娠中の母親に対し、いつどのようにかかわれば良いか、妊娠期に応じたケアにむけて根拠を提示することができる。また、経産婦に対する育児支援において、援助のあり方を検討する基礎資料を提供することができる考える。

方 法

本研究は、構成的質問紙法を用いた量的研究である。第1子が4歳未満で、20歳以上40歳未満の第2子妊娠中の母親を対象として、妊婦健康診査時に横断的調査を行った。調査内容は、母親と第1子の属性、妊娠の受容、夫との関係、実母との関係、経済状況への満足度、母親の第1子への養育意識である。養育意識について、「育児生活へのストレス」「否定的育児行動」「育児肯定感」の下位因子からなる養育意識・行動尺度と、「子育て満足感・生きがい感」「子育て負担感・不安感」「子どもイメージ」の下位因子からなる子ども観尺度を用いた。夫との関係、実母との関係、妊娠の受容もそれぞれ既存の尺度を使用した。データは、統計的に分析を行った。

結 果

第2子妊娠中の母親の第1子に対する養育意識は、妊娠初期、中期、後期の3群においてほぼ同じ様相であった。影響要因については、母親の第2子妊娠への受容状況と、夫との関係が、養育意識に影響すること

が明らかとなった。妊娠各期で見ると、妊娠初期と中期は、実母との関係が良いことが育児肯定感を高くしていた。妊娠後期は、とくに夫との関係良いと育児生活へのストレスが軽減していた。児の属性では、妊娠初期の女兒の母親は、男児に比べて育児肯定感が低く、初期と後期の2歳児をもつ母親は、養育意識の否定的な側面が高くなっていた。

考 察

第2子妊娠中の母親に対して、援助者は、母親が妊娠を受容でき、夫が母親にとって重要な存在であることを自覚できるように、かかわっていくことが必要であると考えた。また、妊娠初期はとくに実母との関係、後期はとくに夫との関係が養育意識に影響しており、初期は実母と良好な関係があるかを把握すること、後期は夫婦で2児の親となることへの準備ができるようかかわる必要があると考えられた。その機会として、妊婦健診や両親教室があげられた。第1子の属性では、2歳児をもつ母親と、妊娠初期の女兒の母親について、配慮が必要であることが示唆された。

総 括

本研究では、第2子妊娠中における、母親の第1子に対する養育意識への影響要因について、妊娠各期の特徴が明らかになった。第2子を迎える移行期において、妊娠中の母親にいつどのような援助が必要であるか、その一端を示唆することができたと言えよう。この時期の母親の心理的特徴を理解し、母親が第2子妊娠という危機的な状況をスムーズに乗り越えて、新たな家族を健全に形成していけるよう援助していくことが大切である。

2. 好中球の機能制御とプリン体

伊 藤 洋 志

は じ め に

好中球は白血球中の40~60%を占める最も多い細胞で、毎日およそ1,000億個もの数が産生されている。好中球は循環血液中から最終的に組織へと移動し、異物、特に細菌などの病原微生物を認識して貪食し、活性酸素 (O_2^-) の産生、水解酵素の放出等によって迅速かつ強力に殺菌し、生体防御に中心的な役割を果たしている。

一方、好中球の殺菌能を主とする強力な機能が不適切な場所や状況で発揮されると、周囲の組織に傷害を及ぼすことになる。生体はこれら好中球の機能を免疫グロブリンや補体、種々のサイトカインや走化性因子などによって巧妙に制御している。

好中球が中心的に機能する炎症巣では、大量に集積した好中球自らの細胞崩壊等により、細胞中に存在する核酸成分が放出されると考えられる。そこで、adenosine など種々のプリン体が好中球の機能を制御する可能性に着目し研究を行ってきた。これまでに得られた実験結果について、以下のような内容を紹介したい。

方 法

健康人の末梢血より分離した好中球を用い、好中球の O_2^- 放出能並びに遊走能を測定した。 O_2^- 放出能は、SOD で阻止される cytochrome C 還元量から算出

した。遊走能は multi chamber 法により測定した。

結 果 ・ 考 察

1. O_2^- 放出能; fMLP 刺激では adenosine, inosine, guanosine いずれによっても濃度依存性に有意に抑制された。adenosine の O_2^- 放出抑制作用は、A2a receptor antagonist により完全に消失した。opsonized-zymosan 刺激では adenosine により軽度抑制された。しかし PMA 刺激では adenosine は全く抑制作用を示さなかった。inosine, guanosine についてもその程度に差があるが、ほぼ同様な所見が得られた。

2. 遊走能; fMLP 10^{-8} M では adenosine は濃度依存性に遊走を促進する傾向がみられた。fMLP 10^{-7} M では有意な変化はみられず、fMLP 10^{-6} M では adenosine は濃度依存性に遊走を抑制する傾向がみられた。inosine においても同様な結果が得られた。一方 IL-8 を用いた遊走では、adenosine および inosine は IL-8 10^{-8} ~ 10^{-6} M のいずれにおいても遊走を促進した。

このように adenosine, inosine, guanosine は、好中球の機能に対して有意な作用を示すことが明らかにされた。各種プリン体が好中球機能を制御する機構を明らかにすることによって炎症病態を解明し、また炎症制御に関する知見を求めたい。

3. 超音波を用いたヒトおよび動物の軟骨硬度測定

—骨軟骨移植術を中心に—

黒木 裕士*, 中川 泰彰**, 森 浩二***, 小林 雅彦**

安良 興**, 鈴木 隆**, 水野 泰行**, 安東 慶治*

大橋 徹夫****, 池内 健****, 中村 孝志**

はじめに

骨軟骨移植術 (OCG) は限局した関節軟骨病巣部にあけたレシピエントホールに、関節荷重に直接関与しない正常部関節面から採取したプラグ状軟骨を移植する手術である。共同研究者の森らによって開発された超音波装置の研究により、軟骨表面からの超音波反射波の signal intensity は軟骨の硬度に、signal duration は軟骨の表面粗さに、軟骨表面と軟骨下骨からの反射波の時間間隔である interval between signals は軟骨の厚さに相関する指標であることが証明されている。演者はこの装置を用い、ヒトおよび実験動物の OCG における関節軟骨測定を行っているので報告する。

対 象

OCG を施行したヒト 7 例 7 膝関節および 6 ヶ月齢のブタ (体重約 100 kg) 12 膝関節を測定対象とした。

方 法

超音波装置を用いてヒトおよびブタの OCG の前後における軟骨測定を行った。ヒトにおいては手術前の

病巣部軟骨、その周辺正常部軟骨および OCG 後のプラグ軟骨も測定した。

結 果

OCG 前後におけるプラグ軟骨の signal intensity, signal duration および interval between signals に有意差は認められなかった。病巣部軟骨の signal intensity および interval between signals は有意に低く、それぞれ周辺正常部軟骨の 19.4, 64.1% であった。OCG は、周辺正常部軟骨の 139.3% の signal intensity, 105.8% の signal duration, 107.0% の interval between signals をもつプラグ軟骨で病巣部軟骨を置換した。

結 論

超音波測定により、OCG の手術時にはプラグ軟骨の各指標は有意な影響を受けていないこと、および病巣部軟骨は周辺正常軟骨と同等またはそれ以上の硬度をもつプラグ軟骨で置換されたことが初めて証明された。OCG の術後の超音波測定についてはウサギを用いた別の実験で調べている。

* 京都大学医学部保健学科

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53

Division of Physical Therapy, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyoto University

** 京都大学医学研究科整形外科

Department of Orthopaedic Surgery, Graduate School of Medicine, Kyoto University

*** 山口大学医学研究科応用医工学

Department of Applied Medicine Engineering Science, Graduate School of Medicine, Yamaguchi University

**** 京都大学再生医科学研究所

Institute for Frontier Medical Science, Kyoto University

受稿日 2005年9月9日

健康科学集談会抄録集

4. 精神医療の構造転換と早期作業療法

—京都大学医学部附属病院精神科作業療法を試み—

山根 寛*, 腰原 菊恵*, 林 拓二 (Dr)**

はじめに

2002年の障害者基本計画に引き続き、2004年に精神保健医療福祉の改革ビジョンが提示され、入院医療中心から地域生活中心にむけて精神保健医療福祉体系の再編と基盤強化の具体的指針が示された。本学医学部附属精神科神経科における作業療法（以下 OT）の試みより、精神病床の機能分化によるニューロングステイ防止の要となる早期作業療法の方法と課題について報告する。

対象と方法

午前中 1 対 1 の個人作業療法と身体自我の回復を目的とした小グループ 2 コマ、午後は月～金曜日パラレルな OT を、常勤 1 名の作業療法士を中心に保健学科教員 2 名と他職種が補助し行っている本学医学部附属病院精神科神経科の OT。OT 開設後 2 年弱の処方、参加数、利用期間、プログラム、OT 経過より、精神科早期 OT の機能分析と課題検討を行った。

結 果

早期 OT の場が安定して機能するまでに 1 年余りを要したが、ほぼ安定してからの処方患者の構成は、在籍患者数 70～80 件、入院・外来処方数比 2:1、月平均処方数 10 件前後、1 日述べ対象数 20 名弱である。統合失調症（約 45%）を中心に、思春期の神経症圏と感情障害圏がそれぞれ 20% 弱、その他で、年齢は 20 歳代 25% を中心に 30 歳代 20% 強、10 歳代 10%、40、60 歳代がそれぞれ約 15%、全体では 10～70 歳代と幅広いが、

思春期・青年期の大きな山と感情障害を中心とした初老期の小さな山がある。OT 対象者の約 30% が入院 1 週間以内、半数が 3 週間以内に処方が出され、約半数が OT 開始から 1 か月で退院している。退院後は 7 割が自宅や自宅近辺の地域医療・福祉施設を利用し、2 割程度が当院外来 OT を利用している。

具体的方法と課題

病的状態からの離脱と現実への移行の援助を主目的にする早期 OT は、パラレルな場を毎日定時間帯に同じ場所で行うことを基本にすれば可能である。プログラムは、①早期導入をサポートする個別対応、②パラレルな多種目作業プログラム、③現実感や身体自我の回復のための、粗大で緩やかな身体レベルで関わるスモールグループ、があるとよい。対象となるのは、要安静期がすぎたが何もしないでいると落ち着かない状態、もしくは疲弊により活動性が低下し遷延化しそうな状態、比較的安定が早く退院までに少し基本的な心身の機能の回復や確認が必要な状態にある者などである。安静と休息で早期退院が可能なのは、あえて導入の必要はない。導入の判定は、対象者自身が見て触れてという見学方式がよく、その上で、個々の状態に応じて①、②、③のいずれから導入するかを決める。いずれも精神運動性の拡散反応が見られる場合は、導入時期の再検討が必要である。現在、早期退院者の外来 OT によるサポートに入院と同じパラレルな場を利用しているが、精神機能的な差もあり外来 OT とデイケアの治療構造を活かした早期退院者のサポートシステムの確立が必須で検討中である。

* 京都大学医学部保健学科作業療法専攻
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53

Division of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyoto University

** 京都大学医学部附属病院精神神経科

Department of Psychiatry, Kyoto University Hospital

受稿日 2005年9月9日